授業実践のひろば

本畳みから和装文化を学ぶ

― 高校家庭科における生活文化の指導の一例として ―

仲　田　郁　子
國學院大學栃木短期大学　(元)千葉県立流山おおたかの森高等学校

日本家庭科教育学会誌，63(2)：79－82，2020

1．はじめに

2013年12月，自然・四季・年中行事をコンセプトとする和食の世界無形文化遺産登録が実現した。このことは我が国の伝統文化が世界に広く評価されたことを意味している。しかし，このような世界的な評価と比較し，国内では社会環境の変化により生活文化の継承が危うい状況にあり，教育においてその継承と創造に取り組む必要があると考えられる。学校教育で衣食住を含めた生活文化教育を担う家庭科は，その任は大きいものがある。

筆者が所属する生活文化研究会（亀井佑子代表，以下本研究会と記載）では，家庭科カリキュラムの中に「生活文化」を明確に位置づけ，小・中・高校の発達段階に即した系統的・継続的な授業開発を行い，その担い手たる次世代の育成を家庭科教育で図ることを目的として，研究を続けてきた。

その一環として，高等学校家庭基礎の衣生活領域において，浴衣の着装と本畳みを題材として授業を実践した。本稿はその報告である。

2．授業実践

(1) 背景

中央教育審議会答申「幼稚園，小学校，中学校，高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善について」(2008）において，伝統や文化に関する教育の充実が取り上げられ，家庭科の関連事項として，「衣食住にわたって伝統的な生活文化に親しみ，その継承と発展を図る観点から，その学習活動の充実が求められる」と明記され，平成21年告示の学習指導要領においても，衣食住の文化の継承にかかわる内容の充実が挙げられた。

平成30年告示の新学習指導要領においても，衣食住の生活領域において，「生活文化の継承・創造」が主としてとらえる視点とされている。

本研究会は，日本家庭科教育学会関東地区会例会における生活文化にかかわる講演と，授業実践報告および祝儀袋の製作が発足のきっかけとなっている。発足後は，生活文化の定義の検討や生活文化に関する先行文献の検討，戦後の学習指導要領や解説，教科書等の検討，授業実践の事例の収集，国立大学附属学校へのアンケートの実施，聞き取り調査などに取り組んできた。授業開発としては，祝儀袋（折形）やお茶，ミニ浴衣の製作などを取り上げている。この祝儀袋（折形）の実践の中から，折ること，畳むこと，結ぶことがわが国の生活文化の特徴の一つであることに気付き，検討を続けながら，衣食住における結びの実践として花結びにも取り組んでいる。

筆者の勤務校では，学校の特色としてさまざまな国際交流活動が実施されており，そのための備品として，男女用の浴衣が約20セット準備されていた。この浴衣セットを家庭科の授業でも活用し，着方を覚えるだけでなく，和装文化についての理解を深めたいと考え，本授業を計画した。

(受付日　2020年3月10日／受理日　2020年4月28日)
Ikuko NAKADA
〒328-8588　栃木県栃木市平井町608番地

(2) 本校の特徴

本校は，千葉県流山市中央部に位置する男女共学の全日制高校である。普通科とともに，県内唯一の国際コミュニケーション科があり，英語教育と国際理解教育に力をいれている。2012年には，ユネスコスクールにも認定された。

家庭科の必修科目は家庭基礎で，普通科は２年次，国際コミュニケーション科は１年次で履修している。対象は，普通科２年生８クラス，国際コミュニケーション科１年生１クラスである。

(3) 授業計画

衣生活領域の指導計画は表１のとおりで，計６時間の計画である。これらの授業の実施時期は2018年６月である。被服の機能と着装，被服の管理と計画をすべてまとめ，単元全体を通して浴衣を題材にして実施した。単元の目標は，①浴衣の着装実習を通して，日本の「折る・畳む・結ぶ」という伝統文化を体験する，②本畳みができるようになることとした。

表１　衣生活領域の指導計画

時	学習内容
1	浴衣の歴史など 各部分の名称，男女の着方の違い
2	男女別に，浴衣を着る。 帯を結ぶ。
3	交代で，練習する。 本たたみを覚える。
4	交代で着装する。 着姿の写真撮影をする。
5	畳み方テスト
6	まとめ　事後アンケート

(4) 授業の流れ

1）第１回（1，2時間目）

簡単な事前アンケートを行ったところ，浴衣に興味を持つ生徒は多いが，その歴史についてはこれまで特に学んだことはないようであった。また日常生活の中の「折る・畳む・結ぶ」について，どのような行為が考えられるか聞いたところ，ふとんを畳む，靴ひもを結ぶ，洗濯物を畳む，タオルや洋服を畳むなどがあげられたが，それらを特に日本の生活文化として意識している生徒はいなかった。

授業はまず浴衣の歴史を理解することから始めた。浴衣の語源は「湯帷子（ゆかたびら）」であること，夏専用のカジュアルな普段着であることなどを確認し，男女の形の違いと各部分の名称を理解させた。多くは綿素材であり，吸水性に富み，洗濯に強いことも併せて指導した。

その後体育着に更衣させて被服教室へ移動し，男女別に分かれて着席させた。男女で着方に違いがあるため，教師はそれぞれについて指導を行う必要がある。まず，男女に共通して気を付けるべき点として，以下の３点を説明した。すなわち①「右前」に着ることとその意味，②裾が広がらないこと（裾すぼまり），③裾線がくるぶし付近で床と並行になることである。

続いて，男女別に指導を行ったが，「おはしょり」のない男子生徒については着姿の写真（雑誌のページのコピー）を準備し，腰ひもの位置など，写真を見ながらある程度自主的に取り組ませた。どの位置に帯を巻けば，恰好がよく見えるか考えるよう促した（写真１）。

写真１　着装練習

女子生徒については，おはしょりの取り方を中心に指導を行い，帯結びの前の段階まで繰り返し練習させた。

2）第２回（3，4時間目）

女子生徒に前時の復習をさせている間に，男子生徒に帯結び（貝ノ口）を指導した。胴のまわり

を３巻すること，腰骨の上を通りながら，前下がりになるように形作ることなどを説明した。帯結びは初めての生徒がほとんどで，難しそうだったが，一人二人と習得する生徒が出てきて，教え合いながら，楽しそうに取り組んでいた。

女子も帯結び（文庫結び）は初めての生徒がほとんどであったが，２，３回練習するとコツをつかむことができるようであった。結ぶという経験が生活の中で少なくなっているようで，「右手，左手」「右足，左足」「右肩，左肩」「○○cm」と具体的に指示しながら説明しないと，すぐにわからなくなってしまう生徒が多かった。

最後に本畳みの指導を行った。定着を図るために，次回実技テストをすることを予告し，練習に取り組ませた（写真２）。縫い目で折って畳むことで，余分な折りしわがつかず，平らに重ねて収納できること，「折り目正しい」という表現はきちんと美しく行動できることを指すが，その意味が和服の畳み方から着ていること，折り目を正しくつけるために「しつけ」をすることの意味を合わせて指導した。

写真２　本畳み練習

３）第３回（５，６時間目）

男女とも自由に着付けを行い，終了した者から順に評価用に写真を撮影した。

本畳みの実技テストは，グループ評価で実施した。グループで順を追って一人ずつ作業をさせ，最後にその正確さを教師が手で確認し，きちんと畳めていない場合は，不合格としてやり直しをさせることにした。十分に練習をさせたつもりだったが，１度での合格率は71.0％（合格49班／全69班）であり，すべてのクラスで複数のグループが不合格となってしまった。日常生活で経験していないからか，ていねいに正しく畳むことの難しさが感じられた。２回目にはすべてのグループが合格することができた（写真３）。

写真３　本畳み終了

３．生徒の感想とまとめ

授業実践後，生徒の振り返りの記述，感想などから，授業の効果を検討した。

生徒の感想の主なものは表２の通りである。本畳みについては，「よくできている」「奥が深い」というように，これまで気づかなかったことに気づき，関心を持った生徒や，平らになることで，平面構成の特徴がよくわかったとする生徒もいた。

表２　生徒の感想

- 縫い目だけ折っていくと，平らになり，よくできている。
- 靴ひもを結ぶより，難しかった。
- １本の帯でかわいい形に結べてすごい。
- 伝統だと意識したことはなかったが，奥が深い。
- 日本人は器用だ。
- たくさん重ねてしまえて，場所をとらないのがよい。

着付けには紐のみを使い，帯も手結びをしたが，結ぶことが難しいと感じた生徒も多かった。全体には「楽しかった」「夏には，自分で着てみようと思った」とするものもあり，興味を持って学習に取り組み，今後の生活に活かそうとする意欲が高まった生徒も多かった。

4．今後の課題

これまで衣生活領域では，基礎縫いを中心に材料や手入れについて取り上げることが多かったが，家庭基礎は時間が限られており，小物づくりに多くの時間をかけることに迷いがあった。そこで本校では，思い切って被服製作をせず，浴衣の着装実習を行うことを試みた（３年次の選択科目で服飾手芸を開講している）。多数の生徒が和装文化に興味をもって取り組んだことは，本校の特徴でもある国際理解教育の視点からも大きな可能性が感じられた。

さらに，畳み方の指導を重視したことで，複数の生徒から，これまで考えたことがなかった我が国の生活文化について考えることができたという感想が挙げられた。茶道部の顧問からは，これまで部活動で浴衣を着用しても，畳める生徒は皆無だったのが，「今年は家庭科で学んだから」といって，自主的にきれいに畳める生徒が増えたというれしい報告もいただいた。

浴衣は身体を包み，折り畳みながら着付け，ひもと帯で結んで仕上げる平面構成の衣服である。着用後はまた畳んで重ねて収納することができ，洋服とは大きく異なる特徴を持つ。このことは，折形や風呂敷包みのような「折る，畳む，結ぶ」という我が国の伝統的な生活文化の理解につながるものであると考えられ，立体構成である洋服の特徴とも関連して生徒に考えさせることができた。今後は浴衣に限らず，和装全般への理解を深める工夫を検討したい。

5．終わりに

日頃授業を実施する中で，ホームプロジェクトについては，課題が見つけられない生徒が多いことが気になっている。日頃特に何も考えずに毎日を過ごしているからだと考えられるが，何気なく過ごしている衣食住生活の歴史的背景や，その中に含まれる多くの先人の知恵に触れることが「深い学び」につながり，生活課題を見つけることにつながるのではないかと考えている。実習を通じて体験的に学ぶ家庭科の特徴として，現代的な生活の課題と組み合わせて，積極的に取り上げたい内容である。

今回本授業のことを聞いた保護者２名から，和服の着付けに興味があり，ぜひ授業を見学したいという申し出があった。時間割を提示して，都合のよいときに自由に授業に参加し，指導の補助をしていただいた。その結果，保護者には，家庭科の授業全般について興味をもっていただくことができたと同時に，教師ひとりで生徒40人の指導をする中で，生徒がつまずいたとき，適宜アドバイスをしてもらうこともできた。このような取り組みを，家庭基礎のすべての領域において活かす可能性について，検討を続けたい。

謝辞　本授業の実践にあたり，生活文化研究会の先生方より多くのアドバイスをいただきましたことに，感謝申し上げます。

参考文献

中央教育審議会答申.（2008）. 幼稚園, 小学校, 中学校, 高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善について

文部科学省.（2009）. 高等学校学習指導要領.

文部科学省.（2010）. 高等学校学習指導要領解説家庭編.

文部科学省.（2018）. 高等学校学習指導要領.

文部科学省.（2018）. 高等学校学習指導要領解説家庭編.

仲田郁子・扇澤美千子.（2012）.「きもの」文化の伝承と発信をめざした授業実践報告書：『「きもの」文化の伝承と発信のための教育プログラムの開発―「きもの」の着装を含む体験学習と海外への発信―』研究グループ実践報告書, 20-25

扇澤美千子・川端博子他.（2012）. ゆかたの着装を題材とする授業実践の試み：少人数制を導入した授業の効果. 埼玉大学紀要教育学部. 61(2)